

ひばりのおじさん

小川未明



町まちの中で、かごからひばりを出だして、みんなに見せながら、あめを売うる男おとこがありました。その男おとこを見ると、あそんでいる子供こどもたちは、

「ひばりのおじさんだ。」と、いつて、そばへよつてきました。

あき地ちになつてゐる、すこしのひろばへ、かたから、あめの箱はこと、下さげてゐるかごを下おろしました。

「さあ、お坊ぼつちゃんも、おじようちゃんも、あめを買かつてください。ひばりをはなして見みせますよ。」と、男おとこは、こしをおろしながら、子供こどもたちの顔かほをながめました。だいぶあめが売うれると、男おとこは、かごのふたをあけて、

「さあ、とべよ。」と、いわぬばかりに、片手かたてを上げて、後あとさがりをしました。

ひばりは、やがて、パイチク、パイチク、なきながら、高たかく、高たかく、空そらへ上がりましました。そして、このまま、どこへかとんでいつてしまひそうに、見みえなくなつたが、そのうちおじさんが、パイ、パイ、笛ふえを鳴ならすと、けんとうを、あやまらずに、えんとつや、たてもの間あひだを分わけて、すく近ちかくへ下おりて、

またかごの中なかへ入はいつてしまいました。

おじさんは笑わらいながら、「私わたしのいのちより、大事だいじにしていますよ。」と、いつもいふのでした。

ある日ひ、おじさんは、いつもの場所ばしょへきて、年としちやんや、義よつちやんや、とめ子こさんのいる前まえで、ひばりをかごからはなしたのでした。

パイチク、パイチク、となきながら、いつものように、ひばりは、空そらへ高たかく、高たかく、上あがつていきました。

このとき、人間にんげんの耳みみには入はいらなかつたけれど、はるかかなたの空そらで、パイチク、パイチクとなき声こゑがしたのであります。

「はてな、どこかしらん。」と、ひばりは、思おもひました。それで、いつそう声こゑをはり上げたけれど、むこうの声こゑは、すこしも近ちかくなるようすがなかつたのです。

「いつてみよう。」と、ひばりは、その声こゑのする方ほうへ、とんでいきましました。青あおい、青あおい、野原のほらの上うへで、二羽わのひばりが、たのしそうに、とんでゐるのです。「やつぱり、野原のほらはいいですね。」と、かごのひば

りが、いいました。

「町も、にぎやかで、いいでしょうね。」

「私が、よんだとき、なぜこなかったのですか。」

「かわいい子供が、あの黄色くなりかけた麦のはたけにいますので、私たちは、心配で、どこへもいくことができないのですよ。」と、野のひばりが、こたえました。

日がくれかかると、野のひばりは、麦ばたけの巣の中へ帰りました。そこには、かわいい子ひばりが、お母さんや、お父さんの帰るのを待っていました。ひとり取りのこされたかこのひばりは、

「ああ、やはり私は、かこの中へかえろう。」と、町の方へとんできました。おじさんは、ひばりがいなくなつたので、気を、もんでいました。

そのとき、パイチク、パイチク、ひばりの声がありました。おじさんは、よろこんで、パイ、パイ、笛をふきました。ひばりは、だんだん地上へちかづくつと、じつと自分を見上げているおじさんの顔と、年ちゃんや、義ちゃん、とめ子さんたちのかわいらしい顔を見ただけであります。

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社
1977（昭和 52）年 10 月 10 日第 1 刷発行
1982（昭和 57）年 9 月 10 日第 5 刷発行

底本の親本：「せうがく三年生」
1938（昭和 13）年 6 月号

初出：「せうがく三年生」
1938（昭和 13）年 6 月号

※初出時の表題は「雲雀の小父さん」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017 年 10 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。